20210314レムナント教会1部

**荒野の正体(テストと備え) (申命記8:1-6)**

　イスラエルの民が紅海を神様の奇跡によって渡りました。その後、だからこそ、これからは輝くすばらしい希望にあふれる所が備えられているだろうと普通に思うでしょうが、神様は紅海の後、荒野を歩ませられたと聖書は記録しています。その荒野は、一言で試練の地であり、イスラエルの期待を裏切るようなとこであり、今までの常識が全く通用しない所でもあります。そして、とても険しい道でもあるし、決して楽ではないし不便な所です。普通には生きていけない所が荒野という所です。神様はなぜせっかく出エジプトさせて、奇跡により紅海を渡らせたのに、その次にこのような荒野を通らせるのか、ということが疑問になる場合があります。その答えが分かっていないと、クリスチャンでも結局ここでつまずいて多くの祝福を逃してしまう残念なことになります。なので今日の聖書が教えるとおりに、神様がなぜクリスチャンの私たちを試練の荒野を通らせるのか、そのことを正しく理解したいと思います。

　荒野の正体は一体何なのか。表ばかりを見ますと、なんでこんなに試練があるのか、なんでこんなに厳しい状況が続くのか、疑問になります。しかし、

1.荒野は、信者の私たちの内側に刻印されている古い人とその古い人の習性をさらけ出すために許されるものです。

これが荒野の正体なのです。イスラエルの人たちは紅海の奇跡を見て、そこで神様をハレルヤと賛美を捧げました。なのに、しばらく後、食べ物に少し困るようになり、お腹がすくようになりましたら皆が大騒ぎになりました。なぜこんな荒野に私たちを連れてきたのか。ここで飢え死にさせるつもりなのか。とつぶやき、不平不満を吐き出しました。その時に神様がマナを用意して与えられました。それについて神様はこのように言われます。食べ物で騒いでるイスラエルの民にマナを与えられたということは、人がパンだけで生きる者ではなくて、神の口から出るひとつひとつのことばによって生きる者だということを分かってもらうためだったと。言葉を裏返しますと、彼らは出エジプトの奇跡を見て、紅海を渡っても、そして、ハレルヤとその奇跡の喜びのゆえに神様を賛美しても、内側には古きものがそのまま残って、自分たちが生きるのはパンによると思う習性を持っていることが表され、つまり内側は、条件、環境、状況に左右されるしかない、古いもののままだとわかりました。だから、試練の前に遭遇したときに内側にあるものが表に出てしまうわけです。「ほら、あなたがたはハレルヤと賛美をしても、実はいまだに内側にあるものは古い習性のままだろう」と見せられる場面です。

この内容は、イエス様がサタンに試みられるときにイエス様がおっしゃったことばでもあります。サタンが40日の間、断食をしていたイエス様のところに現れて、この石をパンにして食べなさいと誘惑したときに、人はパンだけで生きるものではない。神の口から出ることばによって生きる者なのだ。つまり、人間という者は、神によって生きる者であって、人の幸せは神によるものであって、人のいのち、死ぬか生きるかは神の御手にあるものであって、パンにあるものではないという意味です。自然世界によって私たちが支えられているわけでもないし、お金によって人間の幸せが左右されるわけでもないのに、私たちはパンがないと死ぬと思います。パンがないと死ぬのでしょうか。死にます。パンがないと死ぬのでしょうか。死にません。神から離れているときにはパンがないと死ぬ、自然災害によって死ぬというように思い込んでいるでしょうけれども、それは神様を知らないときの話なのです。人間はそのパンを与えられる方、自然世界を支配なさっていらっしゃる神によって生きる者なのです。でも、救われたのにもかかわらず、今までの古い習性、お金によって、パンによって、条件によって自然に支えられてというような習性がそのまま残っているので、条件、状況についつい左右されるようになるしかありません。その状態ではカナンの征服は無理なのです。なので神様は試練の前に導かれることによって、内側にあるそのような習性をさらけ出す神様です。

　ある時、モーセが神様からみことばをいただくために山に登って祈っていました。でも、なかなかモーセが戻ってこないので、下ではもうモーセは私たちを捨てて逃げてしまったよ。だから、これから私たちを守るためにエジプトでやっていたように金銀を集めて、金の子牛を作って、偶像を作って、これがこれから私たちを守って導かれる私たちの神なのだよと大騒ぎをしました。荒野を通ることによって、少し自分の願い通りにいかないで、答えがなかなか現れないなと思った時に、ちょっとだけ隙があれば私たちはついつい自分が対策を立てて、神以外の違うものを頼ろうとします。宗教と偶像に走ります。神様を離れていたときには、それが私たちの当たり前な本性でした。救われた後も、私たちの内側にはそのような本性、神以外に何かがあればとついつい昔に戻って違う何かを頼りにしようとする習性、癖というものが染み込んでいます。それが試練の前で、特に神様の答えが現れないなという状況の場合に、ついつい出てしまうわけです。

それから、神様がアロンを祭司として立てたときに、他の多くの部族の長たち、その中でも特にコラの子孫たちが「なぜレビ人のアロンだけが神様に待遇されるのかと不満を口にしました。アロンを立てられた裏にいらっしゃる神様のことはまったく気にしないで、人間を見てそれにつまずいたり、人間によって左右される癖、その習性がそのまま現れました。人間を見て比較したり、競争の相手と思っていたり、だからこそ妬んだりというような古き自我、古きものが、試練の前でそのまま現れます。人によってつまずいたり、人と分派を作ったりというようなことになってしまうのです。何もないとき、奇跡を見たときにはハレルヤしますが、しかし、ちょっとした試練が目の前に現れたときには、この古い習性が露わになり、荒野の40年間を通して証明されたと聖書は証言しています。

なぜクリスチャンなのに試練があるのか。なぜこんなに辛いことがあるのか。なぜ常識が通じない、今までの普通が全く通用しない状況があるのかと疑問と葛藤があるでしょう。けれども、実はそれがなければ私たちの内側に刻印されているいらないもの、古き人間、古い習性などが何なのか、それがあるのかどうかも気づかないわけです。神様はそれを表に現すために試練の荒野を通らせるお方であることを忘れないようにしましょう。

そうすることによってクリスチャンひとりひとりがその試練の前で反応する自分を見て、

2.自分の古い自我に対して真正面から否定しながらそれを捨てるようになります。

これが荒野の正体です。神様はそのようなテストのために試練の荒野を通らせます。それを知らないと、試練の前で、イスラエルの民のように不平不満、つぶやきばかりをして人生が終わってしまいます。荒野は単につぶやくための材料ではありません。どんなに辛い試練が、どんなに自分の常識に合わない、期待を裏切るようなことがあるにしても、そこには神様の御心があります。古い習性を明らかにして、それに気づいてもらって、クリスチャン自ら古い自我を徹底的に否定して捨てること、それが神の願いであり、神様の訓練であり、それが試練の荒野の正体です。以前の自分、古い自分、古い自我では無理だ、逆に邪魔なのだと気づいてもらうことが荒野の目的です。まるで伝道者であったパウロがローマ7：22でこのように告白しているのと同じことなのです。「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と自分のことを認めて、古い自分、古い自我を捨てようとします。だから、パウロはガラテヤ2：20のように、その私はもう十字架で死んだよ、私は毎日死ぬよと告白しているわけです。皆さん自分のみじめさ、自分の弱さ、試練の前で露わになる自分の古い習性などで自分自身にあまりがっかりしないようにしてください。それが皆さんなのです。それが当たり前なのです。あまりにも長い間、神様を離れていて、教会に通っていてもその祝福を知らないまま宗教に埋もれていた時期が長いので、その癖が刻印されているわけです。だから、自分自身に対して高慢になる理由もないし、失望する理由もないし、他人と比較する必要なども一切ありません。素直に認めることが私たちのやることであり、クリスチャンの信仰です。荒野の試練を通ることによってそのようになります。そうならないと神様はその荒野を終わらせることはありません。次にまた荒野、荒野、荒野…がずっと続いて、その人はずっとつぶやきばかりで、ちょっと収まったのかなと思うとまた次に荒野。それではいつカナンに入るのでしょうか。古い自我、古い自分が露わになり、それを素直に認めることによって正面から古い自我を否定するようになること、これがいやしです。試練がその薬、治療方法になるわけです。

　3.そのように自分の自我を否定するようになれば、最終的にその人は、キリスト・イエスの中にある新しい自我を発見して、新しく始めるようになります。

これが試練の荒野の正体です。ただの辛い荒野ではありません。ただの砂漠ではありません。表面ばかり見て、そこに右往左往することがないようにしましょう。荒野は辛いものでしょうけれども、その荒野を通してキリスト・イエスの中にある新しい自我を発見するようになります。その新しい自我をしっかり握って、それと向き合って新しく始める、これがカナンに備えることになります。

その人はOnlyキリストを告白するようになり、Onlyキリストに集中するようになります。先ほどパウロがこの死の体から誰が私を助けることができるでしょうと嘆いたでしょう。試練の荒野を通ることによって、自分の古いものが現れたときにそうなります。そこですぐさまパウロはその次にローマ7：25、8：1においてこのように告白します。「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。古い自分に素直に気づいて素直に認めた場合には、キリストとの間に躊躇することもなく、1秒たりとも間を置く理由などありません。すぐにキリストに切り替えます。だからこそキリストなのです。Onlyキリストになります。他に行くべきところはありません。他に行って助かるところもないし、歓迎されるところもないし、どこにもありません。古い自我に気づいた場合には、だからこそキリストしかいらっしゃいません。私たちはすぐさまその間に道徳をはさんだり、自分の経験をはさんだり、良心をはさんだり、律法をはさんだりしようとしますがいけません。そうする理由もありません。パウロは[この死の体]からすぐに切り替えてキリスト・イエスになりました。それが荒野の正体です。これを福音と言います。義人は信仰によって生きるわけです。古い自我とOnlyキリストの間には間がありません。今まで私たちはその間に間を置かないと無礼なものというような教育を受けてきました。これが世の中の限界です。世の中から図々しいと言われても仕方がありません。イエス・キリストの福音は 世の中にはない法則なので、死の体で間違いないけれども、間を置かずにすぐさま切り替えてキリスト・イエスの中にあって罪に定められることはありませんと。そこでクリスチャンはこのように告白します。Ⅰコリント1：30「しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました」。つまり、イエス・キリストが誇りなのです。イエス・キリストが自分の義であり、イエス・キリストが自分の喜びであり、イエス・キリストがいのちであり、イエス・キリストが希望であり、イエス・キリストが盾であり、イエス・キリストが避難の場であり、イエス・キリストが平和であり、イエス・キリストがすべてなのです。自分はそこに存在しません。これが新しい自我です。イエス・キリストの中にすべての知恵と知識の宝がある。つまり、キリストに切り替えることによって古い自我を否定して捨てて、イエスで十分だよとなることです。これが新しい自我です。この新しい自我に切り替えて備えられていないとカナンに向かうことは無理なのです。神様は、私たちを知らないからテストしようとしているのではありません。すでに紅海を渡ってハレルヤと賛美していることも聞いていらっしゃいます。しかし、私たちの内側に古い習性が染み込んでいることをご存知の上で荒野を通らせるということを覚えていてください。パウロのようにこの死の体、このみじめな人間、古いものを認め、だからキリストがその古い人間とともに十字架で死なれました。そのことを覚えて告白することが正解です。それこそが答えなのです。Onlyキリストになり、自分を忘れ自分を捨ててキリストにある新しい自分、イエス・キリストで十分である自分、それを教えるために荒野を通らせました。それが申命記8：4にこう書いてあります。「この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった」。40年の間、服一着で十分でした。パンがないと生きていけないと普通、常識的にはそう思うでしょう。パンがなくても神様は私たちを十分に生かせることができる方なのです。創造の神様なのです。もちろんその自然の法則を無視するわけではありませんけれども、それは神様が作られたことなので、それを乗り越えていくらでもなさいます。ノアの箱舟の中は酸素が足りません。一か月間、外の酸素が入らないまま箱舟が守られているということは今の常識、科学的には考えられません。だから、皆嘘だと言っているでしょう。酸素がないから生きていらないでしょうか。違います。神様がいらっしゃらないから生きられません。その酸素を作って供給される方は、酸素がないときに酸素ではないものも作られる方なのです。なのに私たちは神様を離れていたときの習性が染み込んでいて、ついついそれに振り回されるようになります。神以外のものを頼ろうとしています。神の他の何かによって支えられていると思ってしまいます。自分の支えになっていた何かが消えてなくなったときに人生そのものが消えるでしょう。それが私たちのレベルなのです。それは支えが間違っているからです。それが皆さんを支えているわけではありません。そのすべてを支配なさって宇宙を造って太陽も動かしておられる神様だけが支えです。神様が太陽を通して熱を与えていらっしゃるだけであって、太陽がないから私たちは生きていられないわけではありません。進化論などの影響によってクリスチャンでもぐじゃぐじゃになっているわけです。神によって生きるということをさっぱり忘れています。忘れているというよりは、そうじゃないものが染み込んでいるわけです。神様はそのすべてをご存知の上で試練の荒野を通らせることによって整えられるわけです。キリストOnlyにして新しい自我、キリストに頼り、キリストを誇りにして、神様を助けにする人間に整えられます。40年の間、服一着でも大丈夫でした。足も40年間、砂漠を歩いていたにもかかわらず、サンダル一足しかありませんでした。けれども、はれることもなく怪我もありませんでした。そんなことがありえるのでしょうか。ありえます。キリスト・イエスの中にあって、神様が守られます。だから、荒野でも大丈夫なのです。私たちに弱さがあっても大丈夫なのえす。これが新しい自我です。キリスト・イエスにあって天にある霊的すべての祝福をいただいているものだし、この祝福から切り離すことができないし、患難、飢え、死、剣、危険、何があっても圧倒的に勝利できるし、すべてを働かせて益となる、そのような存在になりました。弱い自分自身を見ないで、環境によってふらふらする古いものと付き合わないで、それを切り離して否定しながら捨ててください。キリストの方に、キリストにある新しい自分、新しい自我、それを信仰によって告白して握るときに、皆さんの中にある暗いもの、偽りのもの、隠れていたものが去っていくようになります。それをいやしと言います。神様はいやしの目的をもって試練の荒野を通らせます。それを知らないで多くの人が不平不満ばかりで荒野にずっと留まっています。残念なのです。

　初代教会の人たちがイエス様に聞きました。「この国を再興してくださる時は今なのでしょうか」と。そのときにイエス様が「それはあなたがたは知らなくてもいいよ。なぜ古い自我に捕らわれて物事を見て判断して質問するのか。それが古い自分なのだよ。あなたがたはイエス・キリストを信じて従っているものではないのか。聖霊が宿るようになり、聖霊に満たされるものではないのか。新しい自分でわかればそういうことはいらないよ。聖霊が臨まれるとどんな状況であろうが力を得て、地の果てにまでイエスの証人となるよ」とおっしゃいました。つまり、イエス様がおっしゃったのは、あなたの考え、あなたの思い、古い枠、古い自我を全部捨てなさい。それで神の契約、神のみことばを握りなさい。自分を否定しながら。しかし、それがなかなかできないので、皆さんの思考を停止させるときを持つために呼吸をしながら、運動をしながら集中するための方法を探しますが、方法の問題ではありません。皆さん自分の思考が停止しないといけないから、自分の思いを捨てないといけないからです。こうだ、ああだという自分の思いが皆さんを苦しめるわけです。環境ではありません。だから、みことばを握らないといけません。みことばは光であり、みことばは生きていて働くものなのです。本当に神のみことばをアーメンと握るときに、それが光となって、皆さんの思い、考え、たましいを照らすようになります。光が照らさない限りは闇は消えません。闇というものは暴れるから消えるものではありません。努力すれば闇が逃げるわけでもありません。闇が消える方法は、光が照らされること以外に方法はありません。イエスは光です。神のみことば、キリストのことばは光なのです。結局新しい自我を発見して、その新しい自我にとっぷり自分が染まっていくときに、その人は2部礼拝の箇所でもありますが、ピリピ4：13にあるように、私を強くしてくださる方にあって、どんなことでも可能なのです。飢えでも満腹でも刑務所の外でも内側でも、今まではそれが全部つぶやきの材料だったのに私には構いません。どんな境遇においても私は満足できるものなのです。キリストにある新しい自我の上に立ったときにです。

なぜ神様は試練の荒野を通らせてまで古いものを表に出して、それを否定することによって新しい自我に立たせるようにするのでしょうか。それはカナンに入るためなのです。カナンを征服しないといけない約束の民なので。そこはこの新しい自我に備えられることによって入れるところです。皆さんはこれから社会に出て、学校に向かって現場で戦うときに、勝利の戦いはこの備えがあってからなのです。だから、試練があるわけです。試練の荒野があるわけです。到底納得がいかない荒野でどうしろというのか。こんな荒野、種をまいても実がならないし、食べ物も何もないし、逃げるところもないし、助けてくれるところもないし、何もないところでどうしろというのかと嘆くかもせれません。しかし、それがチャンスなのです。いやされるチャンスです。古い自分を捨てて。

今現在、皆さんにどのような試練があるのでしょうか。その試練が厳しいかどうか、誰のせいだといろいろ言う前に、その試練の前で自分がどのような反応を見せているのかということに注目してみてください。そして、イスラエルの民と同じ自分を正直に吟味して認めるようにしましょう。それが荒野の目的なのです。その現れた古い自分を看過してはいけません。また、それに縛られていてもいけません。正直に認めることによって、そのような自分を否定して、それをキリスト・イエスへと向かう材料にしてください。この試練があるから私はこうするのだ。この試練さえなければ良い人間なのにと思わないで、試練の前で現れた皆さんのみじめな古い習性を素直に認めることによって、「なるほど、これがキリストOnly、キリストにある新しい自分に引っ越しなさいというサインなのだね」と喜んで受け止めるようにしましょう。キリスト・イエスの内にある自分を発見して、それを信仰を持って認めて感謝するようにしましょう。それから、皆さんがリトマス試験紙として、不平不満、言い訳、弁明というものはクリスチャンにはふさわしくないものだと識別しましよう。それがあるということは、古き自分が今一生懸命動いているのだと見れば正解です。私には不平不満、言い訳、弁明などいらないものなのです。キリストにある新しい自我と向き合ったときに。それから、もう一つ告白します。何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、そういうテーマで生きる者ではないのだ。それによって引っかかったり、つまずいたりする理由はないのだ。私は神の国と義をテーマにして生きる者だねと。

　改めて私を強くしてくださる方にあって、できないことは何もない。そのように自分のことを認めて告白していただきたいと思います。

なぜこのような備えが必要なのでしょうか。皆さんの家庭に皆さんを通して光が照らされ、皆さんが遣わされた現場に福音の運動が行われ、一千大学にミッションホームが建てられ、大学長老が派遣されて、47都道府県に教会を開拓して絶対弟子を探し当てないといけません。237国、5千部族に宣教をしていかないといけない。このようなすばらしい神様の約束があるから、その勝利の道を歩んでもらうために神様は皆さんを備えていらっしゃるということを覚えて、それに従い感謝していただきましょう。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。今日も試練の荒野を通らせました神様の御心を確認することができてありがとうございます。試練の荒野の正体を正しく理解して、古いものを捨てて新しい自我と向き合い、約束の勝利の人生にしっかりと向かうことができるように備えられるときとなるように、いやしの祝福のときとなるように、自分からキリスト・イエスへと引っ越しするきっかけとなるように荒野を用いてください。感謝してイエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン